

彩の歳時記

平成二十二年 十一月

みし秋の千種はのこる色なくて霜の花さく野辺の朝風

飛鳥井雅親【1416～1490】

「秋に眺めた色さまざまの草花は、冬に来て見れば野辺になく、冷たい朝風の中、いちめん霜の花が咲いている」夜間の冷え込みが厳しさを増し、庭や野辺に早朝限りのさきやかな花が見られる季節、普段は目にとめることもない小さな冬草が白く煌き、花を一斉に咲かせます。古人はこれを「霜の花」と名づけ愛でたと言われます。現在「霜の花」と言われるのは水分が草茎と地面の境あたりで凍り、カンナの削りカス状の霜柱が花のように見える状態を言い、東京では高尾山が有名です。



十一月の異称

霜月 霜が降る月に由来。他に雪待月、雪見月 仲冬など。

十一月の暦

一日 炉開き 茶道の家では、この日、または一番目の亥いの日に風炉(ふうろ)を閉じ炉(ろ)を開く。

三日 文化の日(国民の休日) 皇居で文化勲章授与式が行われる。芸術庁主催の芸術祭が開催される。



七日 立冬【二十四節気】 冬の気配が現れる頃

椿開き始む【七十二候】

七日 酉の市(一の酉) 江戸後期頃から有名なのが浅草の長国寺で、酉の寺とも呼ばれた。明治初年に神仏分離令により鷲神社と長国寺に分けられた。

十四日 埼玉県民の日 県内の各地で協賛行事が行われ、県・市町村・民間団体等の施設で無料・割引や特別公開など様々なサービスが実施される。

十五日 七五三・着物の日 近代以前は乳幼児の生存率が低かった為、男子は五歳、女子は三歳と七歳の成長を祝って神社・寺などに詣(もう)でたことが始まり。



男子の袴儀(はかまぎ)、女子の帯祝など着物に由来する年中行事なので着物の日に。

二十二日 小雪【二十四節気】陽射しが弱まり、冷え込みが厳しく、落葉、平地に初雪が舞い始める頃。

二十三日 勤労感謝の日(国民の休日) 「勤労を尊び生産を祝い、国民が互いに感謝し合う」日。

新嘗祭(にいなめさい) 日本では、古くから五穀の収穫を祝う風習があり、飛鳥時代から始められた最も重要な宮中祭祀(きゆうちゆうさうさい)の一つ。天皇陛下が自ら栽培になった新しい穀物を天神地祇(てんじんちぎ)に供え、自ら食し、収穫に感謝をする。

十五日 憂国忌 小説家・三島由紀夫【1925～1970】の忌日。1970年のこの日、市谷の



自衛隊に楯の会メンバーと乱入、クーデターを呼びかけ、割腹自殺。自身の監督・主演・美術で話題を集めた短編小説『憂国』に因る。没後四十年を迎える。代表作に『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』戯曲『サド侯爵夫人・近代能楽集』作品に多く登場する山中湖畔に文学館がある。

十九日 二の酉 今年はこの酉までなので火事が少ない？



十一月の歌 まちぼうけ 詞 北原白秋 曲 山田耕筰【1886～1965】



待ちぼうけ、待ちぼうけ
ある日せつせと野良稼ぎ
そこに兔が飛んで出て
ころりころげた木のねっこ
待ちぼうけ、待ちぼうけ
しめたこれから寝てまか
待てば獲物が駆けてくる
兔ぶつかれ、木のねっこ
・中略

中国の思想書『韓非子』の「守株待兔」(田んぼの切り株にぶつかり首の骨を折って死んだ兔を持ち帰って食べた百姓が味をしめ、鍬を捨て兔を待つが兔は二度と来ない。稲は実らず、百姓は国中の笑いものになった)の説話が源。詩では「田んぼ」が「さとうきび畑」になっている。



待ちぼうけ、待ちぼうけ
もとは涼しいきび畑
いまは荒野のほうきぐさ
寒い北風木のねっこ